慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世資本主義と地代説（ゾムバルト教授の資本主義起源説に対する史的批判）
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.3 (1913. 7) ,p.503(87)- 542(126)
JaLC DOI	10.14991/001.19130710-0087
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130710-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を得ざる可し。

殊に農業上に於ては各人間利益の衝突少なく、經營の方法概ね相類して同地位者間の結合容易なるものあり。從て組織運動の一度社會の一隅に發生するや、容易に爾餘の方面に波及すること遙に工業界の組織に勝り、其團結亦遙に鞏固なるの傾あるは既に前に述べたる所の如し。伊國に於ける農業勞働者の運動が一度其端を發するや、數年にして顯著なる發達を爲せると共に、工業上に於ける勞働組合と等しき單純なる勞働組合より更に一轉して一部的の共同經營を事とせる小作組合に發展せるが如き又正に這般の消息を傳ふるものならざらんや。吾人は決して之を對岸の火災視するを得ざるなり。

近世資本主義と地代説

(ゾムバルト教授の資本主義起源説に對する史的批判)

阿部秀助

目次

一、ゾムバルト教授の性行
二、近世資本主義論の梗概
三、經濟學上の諸概念と資本主義
四、近世資本主義と其起源説
五、地代説と其反證
六、結論

一

滯歐二箇年其間殊に深き印象を受けしを「ゾムバルト」教授となす、氏が直截にして明快なる講義は單に獨逸經濟學界の珍たるのみならず、寧ろ同國學界に於ける稀有の產物たり、氏の父は米國流の所謂、Self made man にして身を貧困の間に起し

て、一代にして富、巨萬を重ぬる大地主となりしも、然かも其人や單一なる守錢奴にあらずして、夙に自由主義の理想を懷抱し、最も熱心なる社會改良論者たり、「ゾムバルト」は實に此の如き理想と努力とを有する父によりて千八百六十三年、「エルムスレーベン」(ハルツ)に生る、氏の履歴として吾人の知り得るものは、氏が千八百八十二年の頃、「ピサ」及伯林にて法學及經濟學を修めしと、千八百八十八年、「ブレーメン」商業會議所員となりしと、次で千八百九十年、「ブレスラウ」大學の助教授に任ぜられ、千九百六年轉じて現時の伯林高等商業學校に教鞭を取るに至りし等に過ぎず、(二)遮莫氏の性行を側面的に觀察する時は、吾人にとりて多少の感興なきにしもあらず、彼は富める父を有せしの故を以て教育上、充分なる修養を積むを得しと共に、夙に歡樂の巷に逍遙し、且つ世界の各地を周遊して、其間、社會問題に深き興味を感じ、自から思想上に於ては、「ラッサーレ」及、「マルクス」に近づくに至り、殊に後者は一時彼が思想上の獨占者たりしが、最近、「マックス、ウエーバー」等の影響を受けて、人事の現象は深く人心の根柢に求めざる可からざる底の自覺を惹起すに至れり、又た彼は其性格に於て直情遥行の人にして、自己の學問上に於ける進路を妨ぐるものは、その誰

人たるを不問、之れを一擊の下に粉碎し盡さずんば止まず、斯て彼は屢〻其恩師「シュモラー」を論難攻擊せり、蓋、現時の獨逸經濟學界の主動力に對する反抗的態度は彼れが最大の慾望にして、加ふるに彼の血脉を廻るの血には殆んど保守的思想の血球なく、猶太民族に通有せる社會主義的傾向は、深く彼れが精神上に蟠り、かくて彼れは、「ハインリッヒ、ブラウン」其他社會民主黨の名士と交を結び、殊に、「ハインリッヒ、ブラウン」の社會文庫の如きは數年間に亙りて、「ゾムバルト」自からの獨占物たる觀を呈せり、而して彼が新しきを求めんとする努力主義の上に立てることは、常に學生に向て、「人一日も進歩の念なからざる可からず」との福音を傳ふるによりても、亦た其書中常に Ich nenne dies so und so 或は Sollte heissen so und so の語を繰返せるにても知るを得可し、況んや彼は眼前、只だ朱利の問題を取扱ふ一學究にあらずして、寧ろ大なる藝文の士なり、彼れに與へられたる、「ゾラ」及、「イブセン」の感化は、「マルクス」のそれと異なることなく、その、「ブレスラウ」にあるや現時獨逸文壇の覇將、「ゲルハルト、ハウプトマーン」と交情最も密なりしと云ふ、之れを要するに彼は藝術界に於ける、「リヒヤルト、ストラウス」、「ホーフマンシュタール」、「ヤコブ、ワッサーマーン」の如く獨逸思想界

の新傾向を代表する少壯有爲の學者たることは誰人も異論なき處なる可し。(二)

註一、I. Conrad, Handwörterbuch der Staatswissenschaften. 3A. BVII S. 553. u. Wer ist's ? 5A. S. 1380.

註二、G. Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich. 27 Jhrg. S. 291-300.

二

若、夫れ獨逸の經濟學界に於て能文の士を求めんか、之れを前にしては「ブルノー」、「ヒルデブラント」あり、之れを後にしては「クナップ」、「ブュヒヤー」、「ゾムバルト」あり、而して「ゾムバルト」の近世資本主義論が著者の豫想(一)に反して世人の注意を集中し、その間贊否の論喧しかりし所以は(二)單にそが文辭の富贍なりしのみにあらずして、寧ろ資本主義の成立及本質を根本的に叙述せる點に於て幾多の新見解を齎らせしを以てなり、由來獨逸の史學界に於て最も論難攻擊を得意とする「ベロー」の如き尙ほ言をなして曰く「吾人の見る處によれば此著近世資本主義論は大なる缺點を有するにも不拘、然かも尙ほ顯著なる特色を有す、卽ち其努力的研究と藝術的表現、換言すれば豐富なる研究材料と透徹的なる叙述とが合して一つとなれること之れなり」(三)と、然らば近世資本主義論、上下千三百餘頁は、そも、吾人に向て何をか語る。

彼は卷頭先づ經濟組織を論じて、經濟と經營との區別を明白ならしむると共に、更に吾人々類の經濟的發展を種々なる方面より考察せり、卽ち次表の如し。

- 經濟階段
  - 社會經濟
    - 十、資本主義的交通經濟……
    - 九、近世殖民地の奴隷經濟……
    - 八、上古の奴隷經濟……
    - 七、社會主義的經濟……
  - 過渡經濟
    - 六、都市經濟
    - 五、村落經濟
    - 四、廣義の自己經濟(但、生産消費の分離せる場合)
  - 個別經濟
    - 三、廣義の自己經濟
    - 二、大家族經濟
    - 一、原始的血族經濟……

- 經濟組織
  - 營利經濟
  - 需要充足經濟

- 經濟主義 (四)

「ゾムバルト」は以上の分類によりて「ブュヒヤー」の經濟階段説を打破せりとなすも、然かも此點に就きては贊否の論少なしとせず、之れを贊するものに「ベロー」あり、彼は

「ゾムバルト」の説が只だ嚴密なる意義に於ける史的關係のみに囚はれざるを以て悅ばしき現象となし、(五)之れに反して「ポーレ」は此點を以て同著書全部中に於ける最大弱點を有する處となし、尙ほ經濟階段、經濟組織、經濟形態、經濟時期、經濟主義等の諸概念は徒らに讀者をしてその複雜なる分類に迷はしむるのみ、之れによりて大なる認識的價値を見出すの不可能なる所以を指摘せり、(六)次ぎに「ゾムバルト」は第一篇に於て工業的勞働者の努力より發生する經濟形態たる手工業の中世後半期に於ける典型的組織及之れが存在の條件を明かにし、且つ手工業者の利得は只單に日常生活を維持するに止まり、其財產は何等資本的性質を有せず、何となれば近世的意義に於ける資本なるものは只單に其所有者の生計を維持すると云はんよりは、寧ろ新しき資本を集積せんとするにありとなせり、此の點に於て「ゾムバルト」は「マルクス」と略ぼ同一の見解を抱けりと云ふを得可し、第二篇は近世資本主義の發生史にして、著者は先づ此篇に於て資本力の成立要素として、地代と殖民經濟とを主なるものとし、更に進んで資本主義的精神、工業的資本主義の初期と之れが發展上の障害物とに論及し、加ふるに現時に於ける工業的資本主義の發達、手工業と

手工業者との狀態とに及べり、而して以上の研究範圍は其間多少の除外例あるも多く獨逸に關するものなるを以て、此一卷は或意味に於て獨逸經濟史殊に獨逸手工業史と稱するを得可し、第二卷は資本主義發展の理論的研究なるも、之れを或一面より見るときは、又た近世獨逸經濟史及產業史たり、而して著者は第一篇に於て產業上の自由の如き、新技工の如き或は經濟生活の新式に就きて論じ、殊に其最後の章に於ては「ゾムバルト」獨得の叙述と犀利なる批評眼とを窺ふを得可し、次ぎに第二篇經濟生活の新形態に於て近世的農業組織の成立、近世的都市の起源及本質、需要、販路の新形態を論じ、最後の篇を以て工業上の競爭に關する理論的研究にみて、殊に其最後の章に於て現時に於ける手工業の衰微と之れが救濟策とを論せり、想ふに、吾人が著者に就きて見る處は、其觀察の奇拔なると叙述的能力の發達とにあり、殊に新概念と區別的說明とによりて事物の意義を明かにせんとするは著者の最も重要視する處たり、哲學史家「ウヰンデルバント」嘗て「レッシング」を評せる中に「吾人は「レッシング」に就きて透徹的概念を求めんとせし、「ウォルフ」の面影を認む、然かも尙ほ「レッシング」は單なる一般的抽象化を以て足れりとせずして、更に事物の純全たる

區別を求めんとせらと此語は以てゾムバルトにも適用し得可しと信ず。(七)

註一、W. Sombart, Moderne Kapitalismus, BI, Einleitung, s. XXX IV.

註二、G. v. Below, Die Entstehung des modernen Kapitalismus (Historische Zeitschrit, B. 91 S. 432.)

I. Strieder, Zur Genesis des moderne Kapitalismus.

H. Sieveking, Die Mittelalterliche Stadte (Vierteljahrsschrift fur Sozial und Wirtschaftsgeschichte, BII S. 177)

G. Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich. 27 Jahrg. S. 291.

Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik III. F. B. XXVI, S. 356.

Sozialistische Monatsheft, Jahrg. 1902. Septemberheft.

Neuen Zeit, Jahrg. 1903. S. 485.

Kultur, 1903. Heft 17.

Preusische Jahrbücher, B. 113, S. 333.

Zukunft, Jahrg. 1903, S. 405.

Otto Rieke, Der Fabrikbegriff und die Handwerksorganisation (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. B. XXIV. S. 185.)

B. Harms, Darstellung und Kritik der Wirtschafts=und Betriebs=Systematik im Sombartschen „Kapitalismus" (Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, 29 Jahrg. S. 1384.)

G. Beckmann, Die Bedeutung des Handels im wirtschaftsleben des Mittelalters nach den Darstellungen Sombarts und Lamprechts. (Beilager zur Allg. Zeitung, 1904. Nr 106-108. Deutsche Literaturzeitug, Jahrg. 1902.)

F. Walter, Kapitalismus und Handwerk, (Historisch=Politische Blätter Jahrg. 1903.)

K. Jentsch, Zur Naturgeschichte des Kapitalismus (Die Zeit 1902. Nov. 15)

C. Heiss, Der moderne Kapitalisums. (Besilage zu Allg. Zeitung 1902 Nr. 257)

Naumann, Die Vorgeschichte des Kapitalimus (Die Zeit, 1902 S. 35)

Volkswirtschaftliche Wochenschrift. 8. Moi. 1902

W. Borguis, Zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalismus. (Politisch=Anthropologischen Revue, Nov. 1902.

K. W. Der moderne Kapitalismus (Tägliche Rundschau, 27. April, 1905)

Münchener Neueste Nachrichten, 31. März. 1903

Weserzeitung, 24, April, 1902.

R. v. Ehrhardt, Prof. Sombarts werk äbe den moderuen Kapitalismus. (Wiener Abendpost, 18. Juni, 1902)

Süddeutscher Börsen=Courier, 26. April, 1904)

Der Tag, 10. Juli, 1902.

H. Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie BI. Grundlegung.

R. Häpke ,Die Entstehung der grossen für gerlichen Vermögen im Mittelalter. (Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltnug und Volkswirtschaft im Deutschen Reich 29 Jahrg. S. 1051)

G. Caro, Neue Beiträge zur deutschen Wirtschafts und Verfassungsgeschichte. S. 130.

R. Davidsohn, Forschungen zur Geschichte von Florenz, 4 Teil S. 268.

註三、G. V. Below, Die Entstehung der modernen Kapitalismus (Historische Zeitschrift B. 91. S. 432)

註四、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. BI. S. 67.

註五、G. V. Below, Übe Theorien der wirtschaftlichen Entwicklung der Völker, mit besonderer Rücksicht auf die Stadtwirtschaft des deutschen Mittelalters (Historische Zeitschrift B. 86.)

G. V. Below, Die Entstehung des modernen Kapitalismus (Historische Zeitschrift B. 91)

註六、Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik IIIF. B. 26. S. 358.

註七、W. Windelband, Die Geschichte der neueren Philosophie 5A. BI. S. 546.

三

現時に於ける獨逸經濟學の病は、その餘りに概念に囚へられ、甚しきは之れが奴隷たらんとするにあり、換言すれば、概念の固定性を以て實在の流動性を再構成せんとするの餘りに甚しきにあり、そも概念とは本來、事物の符號又たは象徴的代用者にして、其現す處は其對象と之れに類似の對象との比較卽ち共通なる點に過ぎず、故に之れを一面より見る時は概念を如何に排列結合するも、其得る處は只だ對象の皮相的改造に過ぎざるなり、「ベルグソン」の所謂「幾多の象徴的表現によりて事物の具體的統一を分離せしめんとする點に於て、單純なる概念は不都合なるのみならず、又た哲學上に幾多の學派を生じ、是等の學派は各次、概念の玩具によりて絶ゆるなき遊戯を繼續せり」(一)との言は、移して現時獨逸經濟學の弱點を指摘せるものと云ふを得可く、例者、此の學の根本概念と稱せらるゝ「財」に就きて見るも、「フォン、フィリッポウッチ」の如きは、吾人々類の勞力(肉體的、精神的)は經濟上の財たる能はずとなし、之れに反して「フォン、ウッザー」と「ベエーム、バヱルク」とは、人類の勞力も亦た經濟上の財たるを得るとなせり、(二)次ぎに「資本」なる概念に就きても異論多く、「ベエーム、バヱルク」は資本を以つて生産的資本の意義に解し、其の要素として、天然力及び人類の勞力を擧げ、墺太利學派の泰斗「カール、メンガー」は之れを通俗に解釋して營利行爲に使用せらるゝ資金となせり、然かも本問題は尙ほ解決せられずして、米の經濟學者「クラーク」對「ベエーム、バヱルク」の論爭を惹起すに至れり、(三)而して以上、兩概念と同じく、經濟學上に於ける論爭の問題となりしを資本主義の概念となす、彼の「ヂード」の如き「マーシヤル」の如き「セリグマン」の如き「フィリッポウッチ」の如き何等此語の意義に就きて論せざるものは姑らく之れを措くも、然かも「ワグナー」の如き「シュモラー」の如き「エーレンベルヒ」の如きは、何れも此の概念の構成を否定せり、蓋是等反對

の主なる理由とするところは、(一)此の概念は明白透徹の意義を缺けること、(二)此の概念は經濟發展上、餘りに資本の意義を重要視し、爲めに資本家は憐む可き勞働者を掠奪するものなりとの野蠻的心念を惹起さしむること、(三)此概念を定義とすることは方法論上の誤謬に陷ること、(四)此概念は現實界に於て何等求むること能はざる空想の產物たりとなせり、洵に以上、否定論の中には一面の眞理を有せるものあり、例者「マルクス」の如きは其書中屢〻資本主義なる語を繰り返せるも、その求むる處は認識的價値にあらずして、常に一種の倫理的黨派的色彩を有するにあり、而して斯くの如き倫理的黨派的意義に基づく資本主義が學問上の目的に適せざることは「ゾムバルト」自からも認めしが如し(四)又た「ベエーム、バヱルク」の如きは資本主義を解釋して、資本財の適用せらるゝ生產の場合或は資本の所有者卽ち資本家の指導の下に生產せらるゝ方法となせり(五)更に「ゾムバルト」は此概念を明白ならしめんが爲め次の如き特徵を列擧せり。(六)

(一)資本主義的經濟組織にありては、經濟生活の中心が共產的經濟組織に存せずして、個々の私經濟的組織にあり、而して此經濟組織の運用者は單に消費的方面の傾向及方法を決定するのみにあらずして、同時に生產の方面に於ても然りとなす、換言すれば、彼は經濟上の優越權を握り自己が業務遂行の前途に横はる利益及損失を負擔するものなりとす。

(二)資本主義的經濟組織は所謂、自給自足の經濟組織と異なりて、各次の經濟組織間には分化的職業を有すること。

(三)資本主義的經濟組織は中世に於ける所領經濟の如きものと異なりて、市場的(交通經濟的)組織を有すること。

(四)資本主義的經濟組織は彼の手工業組織と異なりて、生產の要素が總て一人の手に存せずして、永續的に社會の種々なる團集に存せること。

(五)資本主義的經濟組織にありては、生產要素たる勞力には既に分化作用行はれ、指導的、組織的勞働と實行的勞働との間に其人を異にするに至れること。

かくて「ゾムバルト」教授は以上述ぶる如き特徵によりて、資本主義の概念を固定せんとせるも、そも概念其者が、確實に實相を捕ふる能はざることは、吾人が既に前に述べたるが如し、論者は「ゾムバルト」教授も亦た獨逸學界の風土病たる概念に囚へ

られし一人たることを記せば即ち足る。

(註一)Henri Bergson, Einführung in die Metaphysik S. 12-13.

(註二)V. Philipovich, Grundriss der politischen Oekonomie. 8 A. BI 5. 7.

V. Wieser, Ueber den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes S. 42

A. Amonn Der Gutsbegriff in der theoretischen Nationalökonomie (Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung B19. S. 402)

(註三)V. Böhm-Bawerk, Capital und Capitalzins 2A. 2Abt. S. 15-237

Conrad, Handwörterbuch der Staatswissenschaften. 3A. BV.S. 781

C. Menger, Zur Theorie des Kapitals. (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik N. 7. B. XVII S. 1)

I. B. Clark, Ueber das Wesen des Kapitals. u. Böhm-Bawerk, gegen Bemerkungen betreffend. u. "Das Wesen des Kapitals." Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozial Politik und Verwaltung BXVI

V. Böhm-Bawerk, Einige strittige Fragen der Capitaltheorie (Zeitschrift für Volkswirtshaft, Sozialpolitik und Verwaltung B XXIII)

(註四)W. Sombart, Der Kapitalistische Unternehmer (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik B. XXIX S. 691)

(註五)I. Conrad, Handwörterbuch der Statswissensschaften 2A. BV 2S. 25-26

(註六)W. Sombart, Der Kapitalistische Unternehmer (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik B XXIX S. 693-694)

四

「ゾムバルト」は哲人「カント」が嘗て純理批判に於て述べたる「内容なき思索は空虚に

して、概念なき觀照は盲目なり」との意義を、其著書の卷頭に掲げし如く、彼は自己の概念を更に史的證左によりて透徹的たらしめんとせり、かくして彼は近世資本主義を構成せし資本の發生條件に對するの史的基因を(一)貴金屬採掘(二)殖民經濟(三)集積的地代に求めたり、殊に最後の者を以て、此の問題解決の最大要件となし Urkapital となせり。

蓋採鑛の事業は其歴史極めて古く、紀元前三千年埃及人は上部埃及「テベス」地方にて此事業を開始し、紀元前二千年「アッシリア」人は「チグリス」上流の地方にて銅鑛を發掘せしとあり、降て「フェニシア」人は西班牙の南部及希臘「トレチア」地方にて金銅を採掘し、希臘人が「アッチカ」南端の「ラウリオン」より得し銀鉛、銅は「テミストクレス」をして波斯の大艦隊に對抗せしめし戰艦二百艘の建造費となるに至れり、羅馬は「カルタゴ」滅亡後「シシリー」「サルヂニア」西班牙の鑛山權を握り、更に其勢力の東方に及ぶや、小亞細亞、希臘「マセドニア」地方の鑛山をも獲得するに至れり、當時「ストラボー」の記する處によれば、西班牙の鑛山のみにて四萬人の工夫を使役せりと、次に中世にありて「メキシコ」及「ペルー」に相當する地方は獨逸及墺太利の地方にして例者「エルサ

ス、ロートリングン」「レーバータール」「マスミュンステル」「シュワルツワルト」「マンスフェルト」「ゴスラー」「ハルツ」「ブライベルグ」「ザクセン」「トリエント」「イグラウ」「クッテンベルグ」「ベーメン」の如き金、銀の産地として、有名にして殊に十五、十六兩世紀に亙りては「アンドレアスベルグ」「ゴッテスベルグ」「タルノウォツ」「シュネーベルグ」「アンナベルグ」「ヨアヒムスタレル」「シュワッツ」の如き豐富なる金銀鑛發見せられ、爲に歐洲に於ける貴金屬の產額は著しく增加するに至れり、卽ち墺、匈兩國地方より採掘せらるゝ金の平均年額は千四百九十三年より千五百二十年に至る間は、五百五十八萬麻、千五百二十一年より千五百四十四年の間は四百十八萬麻、千五百四十五年より千五百七十年迄は二百七十九萬麻、千五百六十一年より千五百八十年迄は二百七十九萬麻、千五百八十一年より千六百年迄は二百七十九萬麻、而して銀の產額に就てきは千四百五十年より千五百年迄の間は、平均一年の產額八百萬麻、千二百五十年より千四百五十年の間は平均年額五百萬麻、十三世紀の前半期と十二世紀と平均三百萬麻、十、十一兩世紀は約二百萬麻、八、九兩世紀は約一百萬麻なりとす(一)而して是等の產地を所領せる者或は之れを發見し、經營するものにとりて、以上の產出が直接に各次の財產の集

積的要素をなせしことは明白なる事實なり、例者、我邦にありて德川三百年の治を開きし德川家康の經國策は其根本の一原因を彼が財力の豐富なる點に歸せざるを得ず、何となれば當時に於ける彼は武田氏の遺臣、大久保長安を信任して、伊豆、石見、佐渡に於ける金銀山を獨占せしを以てなり、當時、我邦にありし基督敎の師父が本國に送りし報告中に

「內府(家康)は日本に於ても、京都に於ても、關東に於ても、歷代の中にて、尤も富裕なる君にして、巨額の金銀を蓄積し、之れが爲め到る處に頗る人々に恐れらる、內府の京都方面にある時の住居なる伏見の第に貨幣を貯藏したるに數箇月前、其重量の爲めに梁折れて一室陷落したり、此莫大なる財寶は獨り諸人よりの數多の豐富なる獻上物に依るのみならず、重に日本にある處の數多の金銀鑛山より來るものにして、內府は悉く之れを獨占す、加之、近頃再び發見せられ、每年非常の高を掘出すことゝなれり」(二)

家康は金銀を獨占せしの故を以て、慶長六年銀座を伏見に設け、大黑常是に命じて白銀の品位を定め、金銀貨を改鑄せしめし以來、慶長十三年には伏見の銀座を京

都に移し、次で慶長十七年には江戸に銀座を設け、又大阪及長崎にも之れを置きて、專ら異國への渡銀に對する用を辨せしめたり、斯くの如く自己の權力の擴張につれて、務めて統一的貨幣制度の實績を擧げしことは「マルコポロ」以來、貴金屬に富むとの我邦に對する傳説を實際にし、家康の商政をして、當時に於ける歐洲諸國の商業政策と密接の關係を有せしむるに至り、併せて家康が政治的基礎を鞏固ならしむるに至れり、(三)又之を私人の經營に就きて見るに、彼の「アウクスブルグ」に於ける大富豪たる「フガー」家歴代中、殊に家運の隆盛を來たせし「ヤコブ、フガー」は「ゼノア」の「アントニオ、デ、カヴリス」と協同して當時資金の缺乏を感せし「チロル」の領主「ヂギスムント」に前後約十七萬「フロリン」を貸與し、之が抵當として「シュワッツ」鑛山を獲得せし結果、此方面よりの年々の收入は二十萬「フロリン」に達し、かくて彼は漸次其手を擴げて匈牙利「チュリングン」西班牙地方に及ぼし、爲めに其資産は千五百二十七年には二百萬「フロリン」と爲り前後十七年間に九百二十七「パーセント」の純益を得るに至れり、(四)然れども、斯くの如き巨額の直接的蓄積は既に其以前に於て此企業を經營するに相當なる準備資金なからざる可からず、故に之れを以て直ちに資本主義

發生の原形態となすこと能はざるなり。

次ぎに殖民地經濟が、近世資本主義の運動にとりて極めて顯著なる意義を有することは、元より疑ふの餘地なし、而して當時に於ける殖民地經濟の主要なる要素は、殖民地産物の輸入と奴隷商賣となす、前者に就きて「アウクスブルグ」の大富豪たる「ウエルザー」は千五百三年「リスボン」に支店を設け、時の葡萄牙王「ドン、エマヌエル」より印度貿易の特權を得、その翌年六萬六千「デュカット」の資を投じて三艘の船を印度に赴かしめしが、そが齎らせし香料及寶石は百七十五「パーセント」の純益を以て販賣せらるゝに至れり、(五)又た英國は近世史上、奴隷商賣の國として有名にして、彼の「リバープール」の如き、倫敦の如き、「ブリストル」の如き何れも歐洲に於ける之れが取引の中樞地にして、例者、千七百八十七年奴隷買入の爲め亞弗利加に赴きし、同國船の數は百三十七艘其噸數二萬二千二百、六十三、奴隷買入の爲め持參せしものは小刀、鐵砲、火藥、綿織物、羊毛品、麻布等にして、之れに價額を附すれば約七十萬磅、而して是等の船舶にして亞弗利加の海岸に着せるものは卽時、十四の英國商館を通じて奴隷の買入に從事するものと、一方には直接、黑奴の商人に就きて取引するものと

あり、又、奴隷は丁年以上の男子平均の價額十五磅、尚ほ八週間航海の後、西印度に上陸して賣渡さるゝ際の價額は三十五磅、但、航海の途次にて疾病、自殺其他の事項の爲め七十五「パーセント」に減ずるを常とす、次ぎに是等の賣却せられし奴隷は多く英、西、佛等の殖民地に於ける甘蔗栽培に從事せしものにして、當時、世人は彼等を稱して黑色金剛石となし殖民地經濟上、最も重要なる要素となせしを見ても其意義の極めて大なりしことを知るを得可し。(六)

以上、述ぶるが如く、殖民地經濟は近世資本主義發展上、極めて重要なる意義を有せしことは事實なるも、然かも是等の事業たるや貴金屬採掘の場合と同じく、準備的資金を必要とする點に於て、必ずしも近世資本主義發生の根本的要素と見ること能はざるなり。

註一、W. Sombart, Der Moderne Kapitalismus, B I. S. 274-275.

註二、Lettera anuva Scritta dal Giapone al. p. Clavidio Acqvaviva Generale della Compagnia di gieso dell' Anns 1603. p4

註三、拙稿「德川宗康」の商政と「メルカンチル、システム」との關係を論じて、彼が通商奬勵の動機に及ぶ(史學雜誌第一四編一二四〇——一二四六)

註四、A. Stauber, Das Haus Fugger von seinen Anfängen bis zur Gegenwart. S. 32 u. 37.

F. Dobel, Der Fugger Bergbau und Handel in Ungarn(Zeitschrift des historischen Vereins für Schwaben und Neuburg. 1876)

註五、Falke, Die Geschichte des deutschen Handels BII S. 20.

註六、F. Hochstetter, Die Abschaffung des britisbchen Sklavenhandels im Jahre 1806-1897 S. 2-9.

(Sammlung Volkstümliche Vorträge zum Verständnis der Nationalen Bedeutung von Meer & Seewesen Heft 52)

五

以上述べしが如く、貴金屬の採掘と殖民地經濟とが、必ずしも近世資本主義發生の「プロトプラズム」たらざるに於て「ゾムバルト」教授は、果して、何處に之れが祕密の鍵を求めしか、本論文研究の眼目は實に此點に存す。

蓋、中世紀末より近世にかけて、西部歐洲の諸國に幾多富豪の存せしは事實たり、而して是等の徒によりて運用せられし資金の集積作用に就きては「ゾムバルト」教授は在來の商業說を排して地代說を主張せり、蓋彼をして斯くの如き說を主唱せしめし所以は、一は「マルクス」の資本論の感化に基くと共に(一)又た、地代說は當時にありて、社會主義及自由主義及商業過重の論客に向て殊に好題目として取扱はれしものにして、卽ち「ロリア」「ヘルツカ」「ヘンリー、ヂョーヂ」「オッペンハイマー」等の徒に見るが如く、所得又は財產の不平等を以て地代說の上に築くとは、自ら彼の思索を動

かして、資本主義發生の根本的基礎を此地代説に置かしむるに至れり、而して彼は自己の説を確實ならしめんが爲めの豫件として、中世に於ける商業の資本主義的意義を否定せり、卽ち彼の論ずる處によれば、中世以來の商業なるものは各次の財産を蓄積する爲めには其販路餘りに狹少にして、且つ運送費は高額に失ずるを以て、從つて利益少く、其經營は全く手工業的なりとなし、更に大企業家と稱せらるゝ金權的豪族は職業的に商業を經營せるものより生れずして、寧ろ都市の內外に廣大なる地面を所有せし或は所有せる徒輩の間より發生せりと云ふにあり、卽ち此 nouveaux riches を產出せし要素は都市內に自由的に或は强迫的に移住せし地方の豪族と、狹義に於ける patriciat 卽ち我邦の草創名主に類するものにありとなせり。(11)

之れを江戸幕府の時代に見るに、名主の中には私に類別を立てゝ四等となせり、第一は草創名主にして、江戸時代には廿九人あり、是等は其家の祖先が自から開きたる町々の名主にして、天正以前より居住せるもの、又は德川氏に從ひて三河、遠江等より移住せるものにて、名主中最も權威を有するものなり、第二は古町名主と稱せらるゝものにて文化時代には七十九人あり、草創名主に次ぎて古くより其町に居住せるものにて、此二種の名主は歲首及大禮の際、江戸城に登りて物を獻じ謁を賜はること町年寄に同じ、其三は平名主にして地方より町方支配に屬せし新町家の名主なり、其四は門前名主にして、寺社門前町家の名主なり、

又たPatriziatは戰國時代に於て泉州堺の民政の中心をなせし、納屋(ナヤ)とも相似たる處あり、糸偈記によれば海岸に納屋を持ち之を貸して取得となせる者を上分の者と稱し、納屋貸衆とも稱し、其中大なる者十人を十人衆と云ひて、公事訴訟の類は總て此十人衆によりて裁決せられたり。

蓋草創名主及一般町人が都市の內外に於て地所を有せしことは、必らずしも否定す可きことにあらず、例者「キョルン」「リュベック」「ブレーメン」「バーゼル」「ヴォルムス」の如き何れも市內の居住地の多くは、所謂草創名主の所有に歸せしものなるも(三)然かも是等の地面より收得せらるゝ收入は、さして大なるものにあらず、加ふるに其初期に於て極めて少額なりしものを急激增加せしめんとして常に他の大地主たる寺院及地方自治體等の激烈なる反對あり、かくて地面の貸借は多く永代借地の形式に於て實行せられしものなりとす、(四)而して「ゾムバルト」教授は近世資本主義的經濟組織を築きたる資本其者が地方豪族及草創名主によりて收得せられし地代の變化に過ぎざることを確實に證せんが爲め、著者の所謂文書的證明の研究方法

を採用せり、而して之れが史的立證の爲め著者が最も力を注ぎしは獨逸にありては南獨「アウグスブルグ」以太利にては「フロレンス」及「ベネス」となす、(五)論者は之れより著者の研究を中心として之れが史的批判をなさんと欲す。

南獨「アウグスブルグ」の企業的發達は單に其位置の如何によるにあらずして、寧ろ綿織物の如き、金細工の如き見る可きもの多かりしによる、殊に後者に就きては熟練なる手工業者を有し、其精巧なる點に於て、此地の產に匹敵し得るものは只だ「ニュルンベルグ」ありしのみ、尙ほ他に「アウグスブルグ」に於ける特徵は投機事業殊に鑛山事業によりて巨額の財產を集積せし傾向の著しかりしこととなりとす、(六)而して「ゾムバルト」教授は此都市の商業史的研究に對して殊に次の諸點に留意す可きことも云へり。

(一)「アウグスブルグ」は昔時より地方豪族の移住多かりしこと。

(二)「アウグスブルグ」の草創名主は早くより地方の豪族と親戚關係を結びしこと。

(三)「アウグスブルグ」の草創名主は夙に地方に於て大地面を所有せしこと。

(四)「アウグスブルグ」の草創名主は大多數、商業に轉業せること。

(五)地方豪族にして「アウグスブルグ」に移住せし結果、市民權を獲得せしものゝ中には屢〻商業を營めること。(七)

「ゾムバルト」教授が以上の立論を證せんが爲め參考せし「ステッテン」の「アウグスブルグ」名家志(P.von Stetten, Geschichte der adeligen Geschlechter in der freyen Reichs-Stadt Augsburg)が史料として極めて價値少きことは姑らく措くも同教授が同書によりて同市に於ける地方豪族の移住者と見做なすものに「アイスリンゲン」、「バウムガルトナー」、「ベッケン」、「フォン、ベッケン、シュタイン」、「ボイセル」、「エーゲンベルガー」、「エンゲルシャルク」、「フォン、ムルナウ」、「エルリンゲル」、「イルスン」、「フォン、ヴォルフスタール」、「ツェラー」、「フォン、ガルテンベルク」、「ウント、エップフアハ」あり、以上の中「アウクスブルク」の資本家として顯著なる地位を有せしは「バウムガルトナー」と「イムホーフ」の二家にして、「エゲンベルガー」、「エンゲルシャルク」、「イルソンク」の三家は其富の程度に於て遙かに劣れり、況んや其他に至りては一も稱す可きものあらず、(八)先づ「バウムガルトナー」に就きて考察するに、同家の故地が「ジーベンブルグン」にあることは「ステッテン」が主として參考せし「マーンリヒ」の「アウクスブルク」系圖帳

にありとなすも、此書久しく世に傳はらず、故に如何なる程度まで信ず可きやに就きては明かならず、但、同家が「ニュルンベルグ」に移住せし後、千四百六十五年「アントニ、バウムガルトナー」は破産の不幸に遭遇し、遂に同市を去りて一時「ブランデンブルグ」邊境伯「アルブレヒト、アチレス」に仕へ、更に轉じて「アウグスブルグ」に來り、千四百七十五年、「ウルリヒ、アルット」の娘「グラヽ」と結婚せり、當時「アルット」家亦た家運衰微せしを以て、「グラヽ」は何等の財産を齎らすことなかりき、即ち假りに「バウムガルトナー」を「シュワーベン」の土豪の血統となすも、然かも其の所領地代が少しも彼が財産の本質をなさゞりしとは彼の財産が破産以後に集積せられし事實によりて知るを得可し、而して彼の富の基礎は當時にありて屢〻勤勉なる商人が獨立商店開業の手段として代理商を試みたるが如く、彼も亦た此代理商によりて商業上の資金を集積し、次で其子「ハンス、バウムガルトナー」の時に至り、「ベネス」方面の商業と、「カウシュタイン」殊に「シュワッツ」銅山の經營とは同家をして「アウクスブルク」屈指の富豪たらしむるに至り、其納稅額に於て「フッガー」と肩を並ぶるに至れり、次ぎに「イムホーフ」に就きては確實なる史料の吾人に示す處によれば、同家は「ラウギンゲン」の町人にして、後

ち「ニュルンベルグ」及「アウクスブルグ」にありて專ら「ベネス」方面と取引に從事せしものなりとす、其他「イルスング」は其系統に於て「バイエルン」の土豪なるも、しかも長時期に亘れる戰役は其が所領の多くを失はしめ、同家をして「アウクスブルク」に移住せしむるの已むなきに至らしめ、「エンゲルシャルク」は土豪の町人となりしものにあらずして寧ろ町人より土豪と化せしものなりとす、即ち「ゾムバルト」教授が注意せし第一及第五に就きては吾人は次の如く結論せんと欲す。(九)

(一)「ゾムバルト」教授によりて列擧せられし、土豪にして「アウクスブルク」に移住せしものゝ多くは同市に於ける大商人の階級又は大資本家として殆んど何等の意義を有せず。

(二)「ゾムバルト」教授が列擧せし中、大資本家として算するを得る五家に就きて見る時は次の如し。

(A)「エンゲル、シャルク」は町人の土豪と化せしものにして、「ゾムバルト」教授が意味するが如く、土豪の町人となりしものにあらず。

(B)「バウムガルトナー」と「イルスング」との兩家は彼等が「アウクスブルク」に移住

し來りし當時にありては其財産には所領の地代として認む可きものなし。

(C)「イムホーフ」は千三百九十六年に於て僅かに小額の資本を運用せし一商人にして、彼の富は此商業的資本の漸次集積せられしものなり。(十)

「ゾムバルト」教授が擧げし第二の問題卽ち草創名主が地方の豪族と姻戚關係を有せしことは事實なり、然れども此事實は、只だ地方豪族として都市に移住し、或は都市の町人として地方に轉ずる機會を與ふるに便なりしのみにして、地代説に向ては直接の動因となるものにあらず。

次ぎに確實なる史料によれば、十四世紀に於ける「アウグスブルグ」の草創名主六十五名の中、自身商工業より遠ざかりて、其財産を純全たる地代集積の基礎に置くものと思考せらるゝもの其數四十二名(十二)之れに反して商工業に從事せしもの「其數二十三名(十三)而して前者四十二名の中、資本家として許す可きものは只だ一レーリンゲル」家あるのみ、然かも同家に於ける資産は又た商業上の利益に負ふ處多きにあらずやとの疑なき能はず、何となれば十四世紀より十五世紀にかけて、同家の家運を隆盛ならしめし「ウルリヒ、レーリンゲル」は千三百九十八年「クラウス、ウ゛ンデル」なるものと共に百二十八「プロリン」の稅を納付せり、凡て「アウグスブルグ」の租稅帳に於て二名合同の下に課稅せらるゝ場合は多く合名的商事經營の場合に限られしものなりとす、而して「クラウス、ウ゛ンテル」は千四百十三年前後に於て「ベネス」と商業上の取引に從事せり、又「ウルリヒ、レーリンゲル」の親戚に同名の者ありて、專ら「ベネス」方面と商業上の關係を有せしを見れば、論者は「レーリンゲル」の資産を以て悉く地代集積の結果と斷定するの或は早計にあらずやと信ずるものなり、此方面の研究者として有名なる「ヤコブ、ストリュダー」の如きは商業に轉せざる「アウクスブルク」の舊家にして、少くとも十四世紀の終末以來は何等大なる財を集積せしものあらざることを云へり。(十三)

次ぎに商工業に轉せし二十三名の中「アウクスブルク」の資本家として其の名を擧ぐるに足るものは「ゴスセムブロット」「ヘルワルト」「ラウギンガー」「モイチング」「ブ゛ステル」「レム」「スルツェル」「ウェルザー」の八家となす、先づ「ゴスセムブロット」家が始めて商業を經營せしことの史料に見ゆるは「ジグムント、ゴスセムブロット」にして千四百八年の彼れの納稅額は僅かに五「プロリン」にして、其の資産は六百「プロリン」以上に

達せず、然るに其後十年間に於て其資産は五倍以上となり、そが逝きし際には、同家の納税額は二十九「フロリン」、其資産は約三千五百「フロリン」を以て評價せらるゝに至れり、而して同家の所有にかゝる地面は極めて少く、斯くの如き資産の増加は「ベネス」方面との商業上の利益より生せしものなりとす、次ぎに、十六世紀の初期に於て商業殊に兩替業を以て有名なるは「ヘルワルト」家にして、同家にて初めて商業に從事せしものは、「ヘルワルト、ヘルワルト」にして、彼れは千三百六十八年の頃、「アウグスブルク」に於ける自己の住家をたゝみて以太利の「トレビゾ」に移住し、專ら「ベネス」方面に赴くを欲せざる獨逸商人の爲めに之れが仲買商として棉花等を販賣し千四百二十年を以て同地に逝けり、彼に三子あり、卽ち「ハンス」、「アンドレアス」、「ヤコブ」之れなり、而して同家は殊に第三子「ヤコブ」によりて著しき發達をなせしことは長子「ハンス」の納税額が千四百十一年に於て約二「フロリン」なるに、「ヤコブ」は既に千四百五年に於て十七「フロリン」を納付せし事實と、彼等の合名的會社に對して Jachoms Erbote Fratelli の號ありしを以て知るを得可し、蓋し「ヤコブ」は「アウクスブルク」の名家たる「ハンス、レム」の婿にして、其人となり企業的能力に富み、盛んに棉花及麻 (Bochasini)

等の販賣に從事せしことは、彼をして非常なる資産を蓄積せしむるに至れり、次ぎに「ラウギンガー」家に於て初めて資本家的の活動をなせしものは、「ハンス、ラウギンガー」にして、其初期に於ける資本額は約五百「フロリン」に過ぎず、然るに此僅少なる資本は爾後四十年を經て著しく増加し、千四百四十年、彼が死せし際、其遺産は一萬三千「フロリン」に達せり、而して此收益の多くは棉花及食鹽等の販賣の結果によりしものなりとす、次ぎに「モイチング」家にては、「コンラット、モイチング」が千三百六十八年を以て織物業の組合に加入せしことは、現時「アウクスブルク」市立圖書館所藏の史料の明かに示す處たり、而して彼れ逝きし後、その寡婦が納付せし税額より推考するに、其遺産は僅かに百「フロリン」内外にして、此僅少なる資本を以て少「コンラット、モイチング」は父の遺業を繼ぎ、傍ら商人の組合に加入し、更に其子「ハンス」の時代に於て同家の財産は等しく増加し、彼れ逝きし際は其諸子は約二萬四千「フロリン」の遺産を相續せり、而して斯くの如き急激なる資産増加の原因は主として「ベネス」方面との商取引の結果によるものなりとす、次ぎに「フォスラル」に就きて見るに、同家の資産が商業上の利益によりて集積せられしものなることは同家の家記の明かに

吾人に示す處たり、次ぎに「レム」家は、「アウクスブルグ」の舊家にして、且つ同市に於ける屈指の富豪に屬す、而して此資産の基礎を造りたる「ハンス、レム」に就きて、其曾孫たる「ルカス、レム」の記する處によれば、彼れは千三百五十七年、一切の家財を賣却して約五百「フロリン」を得、直ちに「ベネス」に赴きて、十七年間商業に從事し、千三百九十六年卽ち彼れ逝きし際には、同家は「アウクスブルク」屈指の富豪となれり、而して其富源は主として棉花販賣にありとす、次ぎに「スルツェル」が地方に於て大地面を有せしことは明かなる事實たり、只だ同家の企業が果して地代によりてなされしか、或は是等の不動産を動産化せしものにあるかは不明なるも、(同家の系譜帳の寫本は現時「アウクスブルク」文書館の所藏たるも、其記述は十八世紀の初期より始まり、舊き部分は全く缺如せり)元來、同家は「アウクスブルク」の資本家としては何迄「ベネス」等顯著なる意義を有せず、若、強ひて其人を擧ぐれば、千五百八年より千五百十二年に於ける獨逸商館(Fondaco dei Tedeschi)長たりし「リエンハルト、スルツェル」なるも、其資産は全く自己の商事上の經營によりて集積せられしものにして、其額も亦五百「フロリン」以上に達せず、最後に「ウェルザー」家は「アウクスブルク」にては「フガー」に次で有名

なるに不拘、同家が商業を開始せしは千三百六十八年以後なりとの事實の外更に多く聞く處なし、只だ千四百四年の同市租稅帳によれば、當時「ウェルザー」家の當主たる「バルトロメ、ウェルザー」の納稅額は二十「フロリン」なるを以て、其財産は二千四百「フロリン」と推定し得るも、此資産は千四百三十九年減じて二百四十「フロリン」となれり故に「バルトロメ」以後の「ウェルザー」家の資産は千四百七十三年以後に於ける其四子「バルトロメ」「ルカス」「ウルリヒ」「ヤコブ」の商業的活動に歸せざるを得ず。(十四)

以上、述べし以外に「エーム」「ビムメル」「マルチン」「ヴィス」「リエンハルト」「ヴィス」「ヘムメルライン」「アルット」「ハウステッテル」「ヨス、クレメル」「ハンス、チムメルマーン」「ハンス、スチルリン」「ミッヘル、エルデングル」「ヘヒステッテル」「フッガー」の如き織物業の組合より出でし成金黨と「ヤコフ、ヘルブロット」「ハンス、プラントマイル」「ヰルヘルム、メルッツ」の如き毛皮品製造組合より出でし成金黨と「ブルカート、チンク」「グランダー」「マンリヒ」「ヴェラント」「スタムラー」「スツンツ」「ガスナー」「ウルスラット」「クラフター」「リング」「アドラー」「ホザー」の如き手工業的商業組合の階級より出でし成金黨とは、其資産の集積に於て何等地代に負ふ處なし。(十五)

斯くの如く、地代なるものが、當時に於ける資本構成力として必ずしも主要なる意義を有せざることは、果して何れの理由に基くやと云ふに、その第一は當時の都市にありては所謂草創名主なる舊家の地主以外に大地主の存せしこと、第二は土地貸借に關する法律的慣習、第三は市の手工業者に對する保護等を主なる原因となす、卽ち第一の理由に就きては、中世以來、獨逸の諸都市に於ける土着の町人が自己の所有地の一部を新しく移住し來りたる手工業者或は營業者に貸與し、或は賣却せんとするに際して、常に激烈なる反抗を寺院の如き大地主より受くるを常とせり、何となれば寺院其他の宗敎上の團體にありては單に土地の賣買が基督敎の精神に背く理由よりも、寧ろ世上の善男善女の寄進によりて增加する其所有地により出來だけ實際上の價値を得ん爲め、賣却又は貸與の際には町人と競爭して、其利益を自己の囊中に收めんとするにあり、第二の理由としては土地貸借關係に於て十二世紀の中期より十三世紀にかけて最も多かりしものは永代借地にして、一時借地に至りては極めて小範圍に於てのみ履行せられたり、但、此一時的借地も其實、永代借地と相去る遠からざるものにして、短きは八十年、長きは千年に亙れり、斯くの如く土地價額の增加につれて借地料の變化せざることは、又た地代により

て資本を構成するの不可能なる所以なり、況んや、當時獨逸の都市中には市の商工業を發達せしむる爲め、大に手工業者を歡迎し、地代を貪ぼる地主に對しては大に反抗して、是等新入者を保護せし事實あり。(十六)

次ぎに資本主義發生の歷史に於ては古からずと雖(爾餘の伊太利諸市に比して)然かも、「ゾムバルト」説の可否を判定するに最も好都合なるは「フロレンス」たり、何んとなれば此都市にありては金屬採掘の事實は極めて少く(十七)殖民經濟に至りては全く之れを缺如せり、故に「ゾムバルト」に從へば、勢ひ此都市に於ける資本主義發生の根本條件は之れを地代の集積に求めざるを得ず、「ゾムバルト」自からも、かく信じたるが如し、(十八)然り、彼は單に之れを信じたるのみならず、更に進んで同市に於ける人口の增加が十三世紀以來「アルノー」河の彼岸に於ける地價をして騰貴せしめ之が地代は「フロレンス」の資本力に大なる影響を與へしものとなすも、(十九)然も事實上、當時同市に於ける資金の充實は寧ろ商工業の發達に歸す可きもの多く、所謂地代の集積作用が薄弱なることは、當時に於ける同市の富豪たる「モッチ」、「バルヂー」、「プレスコバルヂー」、「ベルチー」、「スピニー」、「チェルチー」、「レルラ」、「ベルラ」、「アルファニー」、「アルチ」、「リュベルチニー」、「スカラ」、「ファルコニェリー」、「パッチ」、「カヴルカンチ」、「メヂチ」、「アッチアイ

ウォリ」「ストロッチ」「ヘルリ」「アバチ」「ジャンフェニリアチ」「ペルチ」等何れも此方面の地面に關係すること少きを以て知るを得可し、殊に十三世紀の終末に於て非常なる財力を有せし「フランッェシー」の如きは徹頭徹尾同市内に何等の土地を所有せず、彼は自己の鄕里より直接佛蘭西に轉じ、茲に大金權家と化するに至りしものなりとす、蓋「フロレンス」に於ける地價の騰貴は、同市に於ける資力充實卽ち資本的基礎の上に築かれたる商工業の發達の結果たり、「ゾムバルト」は實に原因と結果とを顚倒せるものなりとす(廿)蓋「フロレンス」の財力をして豐富ならしめし主要なる原因は法王が政治上の一大勢力者と化せし結果、戰爭其他土木事業等に對して出費を要すること多く、爲に「トスカナ」地方の寺院及修道院等は十分の一稅以外に種々の名目の下に納金を命ぜられ、其度毎に調金をなすものは「フロレンス」の富豪にして、彼等は此間に立ちて非常なる利益を收めたり、又た彼等の中には極めて大仕掛けに鎧、甲、槍等の武器を製造して「バルセロナ」の王「アラゴン」「ネープルス」の王等に賣却せしものあれば(廿一)「ネープルス」王國所産の穀物を獨占的に地中海の各港に輸出せし「バルヂ」及「ペルッチ」兩家あり、(廿二)其他、英國産の羊毛を「フランダー」地方に輸出し、殊に十四世紀以後は同品を海上より、以太利の市場に齎らせしが如き、又た「フランダー」

及佛蘭西産の綿布を「フロレンス」に輸入し更に精選して販賣せしが如き、いづれも同市の資本力を豐富ならしむるに預つて力ありしものなりとす、(廿三)之れを要するに「フロレンス」に於ける資本主義發生の歷史は之れを地代其者に求む可きものにあらずして、寧ろ政治的關係より釀されし經濟上の變化に歸するを正當なりと信ず、彼の詩聖「ダンテ」は不朽の作「神曲」に於て當時の富豪が卑賤の間より起りしことを云へり、「ゾムバルト」が故らに自己の說を成立せしめん爲め Uberti 及 Guidi の同名異人を同名同人となせしが如きは、寧ろ著者の爲めに惜まざるを得ざるなり。(廿四)

次ぎに「ベネス」に對しても、「ゾムバルト」は自己の主張たる地代說を以て之れを律せんとせり、今日、知るを得るものにして同市に關する最も古き記述者たる「カシオドル」の云ふ處によれば其年代は五百三十七八年頃、此地の住民は航海業に熟達し且つ彼等の生活は主として漁業と製鹽業とにありと、(廿五)「ゾムルバルト」も亦た後者を以て「ベネス」に於ける最初の産業となせり、(廿六)蓋、吾人が「ベネス」を考察するに就きて注意す可き事項は所謂「ベネチア」市(八百九年以來)以前に既に同地方に商業の存せることとなりとす、若夫れ商業と海運とが「ベネス」に於ける資本主義發生の主要なる原因たりしことは、十二世紀の後半期に輩出せし「ロマノ」、「マイラノ」の事績に

於て證するを得べし(廿七)又た此地に於ける商業上の利益は普通十パーセントなる時に百パーセントに達せし事實に就きても知るを得可し。(廿八)

註一 K. Marx. Das Kapital, BI S. 679-726

註二 W. Sombart, Der moderne Kapitalismus, BI S. 282-299

註三 M. Foltz, Beiträge zur Geschichte des Patriziats in den deutschen Städten vor dem Ausbruch der Zunftkämpfe (Strassburg; Basel, Worms; Freiburg i Br.) S. 57 u. 72

F. Lau, Entwicklung der Kommunalen Verfassung und Verwaltung der Städt Köln bis zum Jahre 1396 S. 121

C. W. Pauli, Lübeckische Zustände zu Anfang des XIV Jahr. S. 44.

C. Wehrmann, Das Lübeckische Patriziat. (Hansische Geschischtsblätter, Jahrgang 1872. S. 93)

W. V. Bippen, Geschichte der Stadt Bremen. BI S. 174 u. 328

註四 R. Häpke, Die Entstehung der grossen bürgerlichen Vermögen im Mittelalter. Schmoller, Jahrbuch für Gesetzgeburg, Verwaltung, und Volkswirtschaft im Deutschen Reich 29 Jahrg. S. 245

註五 W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. BI. S. 299-324

註六 A. Schulte, Geschichite der mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwissen Westdeutschland und Italien BI. S. 648.

註七 W. Sombart, Der moderne Kapitalismus BI. S. S. 303.

註八 I. Strieder, Zur Genesis der modernen Kapitalismus. S. 43

註九 I. Strieder, S. 41-57

註十 I. Strieder, S. 58

註十一 Stoltzbirsch, Holle, Eylentaler Mulleysen, Schongawer, Felkhwein, Fideler, Schrotter, Hornlocher, Banwolff, Rechlinger, Ravenspurger, Portner, Hailiggrabe, Krenutz, Riederer, Morshaupt, Hoffmair, Rapoldt, Ketnzlmann, Preyning, Bitschlin, Langenmantl von Sparn, Winckler (?), Pfettner, Hangenor, Luitfrid Priol, Vennden, Hurnamos, Onsorg, Dillinger, Mynuer, Gollenhofer, Vögelin, Keullen, Zollrayer, Glaner, Halbherren, Goldox, Bach, Dornawer.

註十二 Rem, Lauginger, Dachs, Meuting, Egen, Breischuh, Dendrich, Vittel, Nördlinger, Langemantle mit dem R. Velmann, Die von Hory, Schöncker, Welser, Hotter, Gossembrot, Reinbott, Herwart, Wessisbrunner, Karg, Sulzer, Ilsung, Pfister

註十三 I. Strieder, S. 87.

註十四 I. Strieder S. 83-138

註十五 I. Strieder S. 142-215.

註十六 I. Strieder. S. 67-89

註十七 千三百七十三年カスチルゼッキオ附近に於て銀坑發掘せられ一時市民の企業熱を沸騰せしめしも其後此事業に就きて記する處なきは明かに此事實の一時的なることを知る可し。R. Davidsohn, Forschungen zur Geschichte von Florenz. II. S. 308

註十八 W. Sombart, Der moderne Kapitalismus BI. S. 295 u. 318

註十九 W. Sombart, Der moderne Kapitalismus BI. 323

註廿 R. Davisohn, Forschungen zur Geschichite von Florenz. 4. T. S. 269-270

註廿一 R. Davidsohn, Forschungen zur Geschichte von Florenz IV 211a, 255, 264, 274, 282, 286, 383, 487, 652-1070

註廿二 R. Davidsohn, IV S. 278

註廿三、R. Davidsohn. IV S. 280
註廿四、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus. BI S. 320-321
註廿五、Cassiodor Variarum lib XII, 24
註廿六、W. Sombart, Der moderne Kapitalismus, BI. S. 315
註廿七、R. Heynen, Zur Entstehung der Kapitalismus in Venedig S. 122
註廿八、H. Sieveking, Aus venetianischen Handlungsbüchern, Schmoller, Jahrsuch für Gesetzgebung, Verwaltung & Volks wirtschaft. 25 Jahrg. S.1516.

六

之を要するに「ゾムバルト」教授が近世資本主義發生の根本條件に對する中心思想は、凡そ巨額の財産なき處に資本的企業は望む可からず、而して中世都市に於ける巨額の財産は地代の集積を除きては他に考ふること能はず」と云ふにあり、かくて彼は此統一的思想を以て幾多特殊的の意義を有する歐洲諸國の都市に律せんとせり、斯の如き特殊的現象の普遍化と、資本の非人格的説明とは「ゾムバルト」教授をして、何等現實界に求むること能はざる、一種の物的史觀の蜃氣樓を吾人の前に出現せしむるに至れり、遮莫、彼が所論の生硬と矛盾とは、吾人をして尙ほ彼は將來發達するものなりとの希望を抱かしむ、吾人は此希望が將來に於て充たさるゝの日あらんことを祈るものなり。（六月十五日、細雨霏々たる朝脫稿）

貨幣數量説に關する諸説

神戸正雄

目次

緒言
(一) 貨幣數量説の肯定説
(い) 貨幣數量を以て物價決定の直接原因とするもの
(a) 貨幣の數量に商品の數量を對置するもの
(b) 貨幣の數量に貨幣の需要を對置するもの
(ろ) 貨幣數量を以て物價決定の間接原因とするもの
(a) 貨幣數量の變化が貨幣の價値評定を通ほして物價に影響すとするもの
(b) 貨幣數量の變化が商品に對する需要の變化を通ほして物價に影響すとするもの
(c) 貨幣數量の變化が金利を通ほして物價に影響すとするもの
(d) 貨幣數量の變化が金利の外に企業の景氣を通ほして物價に影響すとする
貨幣數量説に關する諸説